

書籍の文体と修辞機能の分析のパイロットスタディ

田中 弥生 (国立国語研究所 研究系) *

柏野和佳子 (国立国語研究所 研究系)

加藤 祥 (目白大学)

A Pilot Study of Analyzing Rhetorical Functions and Writing Styles of Books

Yayoi TANAKA (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

Wakako KASHINO (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

Sachi KATO (Mejiro University)

要旨

本発表は、人手により文体的な観点の印象評定が付与されたテキストについて、修辞機能と脱文脈度の観点によって検討する研究のパイロットスタディである。分析対象は、文体の分類指標 (柏野 2013) が付与された『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) の図書館サブコーパスのうちの4サンプルである。修辞機能分析の分類情報を付与し、修辞機能と脱文脈度を特定した。その結果、4つのサンプルに共通する修辞機能があること、また、それぞれのサンプルに特徴的な修辞機能を確認することができ、アノテーションの有効性を示すことができた。しかしながら、少数のサンプルでは文体情報と修辞機能の対応を確認するまでには至らなかった。今後は、文体指標別に選定した分析対象データを増やし、アノテーションを進める。

1. はじめに

本発表は、人手により文体的な観点の印象評定が付与されたテキストの文体特徴について、修辞機能と脱文脈度の観点によって検討する研究のパイロットスタディである。修辞機能と脱文脈度は、修辞機能分析の分類法によって特定される。修辞機能分析は選択体系機能言語理論の英語談話分析手法 Rhetorical Unit Analysis (Cloran 1994, 1999) を日本語に適用した修辞ユニット分析 (佐野 2010, 佐野・小磯 2011) をもとに、日本語文法の枠組みで修正を加えたものである (田中 2022)。修辞は、技巧的なものと捉えられることがあるが、本研究では「修辞機能」を「話し手書き手が発信する際に、言及する対象である事態や事物や人物等を捉え表現する様態を分類し概念化したもの」と定義する。また、文脈や脱文脈化という言葉は、研究分野によって異なる用いられ方をしているが、本研究では、脱文脈度を「発話がコミュニケーションの場「いま・ここ・わたし」にどの程度依存しているか」の程度を表す概念とする。地元のお祭りについて言及するときに、「この神社はにぎやかだね」と述べるのと、「私は先週お祭りに参加した。」と述べるのと、「地元のお祭りが先週開催された。」や「地元のお祭りは毎年9月に行われる。」「祭りは日本の伝統行事だ。」のように述べるのとでは、修辞機能と脱文

* yayoi@ninja.ac.jp

脈度が異なる。これまで、修辞機能と脱文脈度の観点から、児童作文、家族の談話、職場の談話、高齢者グループの談話など(田中ほか 2021, 佐尾ほか 2023, 田中・小磯 2019, 田中 2017, 田中ほか 2022, 2023)の分析から、目的やテーマ、話題内容、状況によって、用いられる修辞機能が異なり、脱文脈度が推移することなどが明らかになっている。

柏野(2013)は文体を分類するための指標として、専門度、客観度、硬度、くだけ度、語りかけ性度の分類指標を提案し、現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)の図書館サブコーパスのサンプルに人手による印象評定から文体情報を付与している。では、テキストが硬い、あるいは軟らかいと感じたり、専門的、あるいは子供向けだと感じたりするのは、どのような言語的特徴によるものか。例えば浅原ほか(2014, 2015)では語彙の観点から文体との対応を確認している。本研究では、文体に見られる言語特徴の修辞機能と脱文脈度の観点との関連を調査する。

本発表では、様々な文体特徴が現れると考えられる書籍テキストに修辞機能分析の分類情報を付与して修辞機能と脱文脈度を特定し、文体の分類指標との関連を検討する。修辞機能分析では、これまで話し言葉中心に分析を行ってきた。児童作文、高齢者の小作文などを対象にしているが、それ以外の一般的な書き言葉についてはまだ分析が進んでいない。本発表は、書籍という媒体のテキストに初めて修辞機能分析のアノテーションを行う、パイロットスタディの位置付けである。本発表の目的は、文体的特徴と修辞機能・脱文脈度の関連を検討することである。課題として、分析対象とした書籍テキストの修辞機能と脱文脈度の特徴を確認する。

以下、第2節で分析データと分析方法について述べ、第3節で分析結果を示し、第4節で考察を述べ、第5節でまとめを述べる。

2. 分析データと分析方法

2.1 分析データ

本発表の分析対象データは、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の図書館サブコーパスに収録されている書籍サンプル4件である。この4件は、初めて書籍データに修辞機能分析のアノテーションを行うパイロットスタディのため、ランダムに選定した。表1に4件の文体的特徴を示す⁽¹⁾。

表1 分析対象サンプルの書名と文体的特徴

SampleID	NDC	書名	専門度	客観度	硬度	くだけ度	語りかけ性度
LBn3.00077	3	2010年日本実現	3 一般向き	3 どちらかといえば主観的	2 どちらかといえば硬い	3 くだけていない	3 特に語りかけ性はない
LBn3.00084	3	時代が動くとき	3 一般向き	3 どちらかといえば主観的	3 どちらかといえば軟らかい	3 くだけていない	1 とても語りかけ性がある
LBn4.00016	4	天文学者の虫眼鏡	3 一般向き	3 どちらかといえば主観的	3 どちらかといえば軟らかい	3 くだけていない	3 特に語りかけ性はない
LBn4.00041	4	遺伝子組み換え食品を検証する	3 一般向き	2 どちらかといえば客観的	2 どちらかといえば硬い	3 くだけていない	3 特に語りかけ性はない

⁽¹⁾ これらの文体的特徴情報は柏野(2015)からダウンロードできる。<https://doi.org/10.15084/00003109>

2.2 分析方法

修辞機能分析は、Rhetorical Unit Analysis(Cloran 1994, 1999) を日本語に適用した修辞ユニット分析(佐野 2010, 佐野・小磯 2011) を元に、日本語文法の枠組みで修正を加えた分類法である(田中 2022)。分析手順は、次のとおりである。

1. 分析単位(メッセージ)に分割し、分析対象を特定する。
2. 分析対象のメッセージについて発話機能を分類する。
3. 発話機能が「命題」のメッセージについて、時間要素と空間要素を分類する。
4. 発話機能・時間要素・空間要素の組み合わせから、修辞機能と脱文脈度を特定する。

以下に手順の概要を示す。

2.2.1 分析単位の分割と分析対象の特定

分析単位であるメッセージは概ね節に相当するが、連体修飾節は独立したメッセージとして扱わない。メッセージは「定型句類」(相槌、挨拶、定型句、節の形でないものなど)、「主節」(単文、及び主節)、「並列」(従属度の低い従属節)、「従属」(従属度の高い従属節)、「引用」(“と思う”などで引用されている部分)に分類する。「主節」「並列」「引用」についてこのあとの分類を行う。

2.2.2 発話機能・時間要素・空間要素

メッセージの種類が「主節」「並列」「引用」に分類されたメッセージについて、発話機能・時間要素・空間要素を分類する。表2に示したように、これらの組み合わせから修辞機能と脱文脈指数が特定される。【行動】[1]がもっとも文脈に依存した表現で、【一般化】[14]がもっとも脱文脈度の高い表現である⁽²⁾。

表2 発話機能・時間要素・空間要素からの修辞機能と脱文脈指数の特定

定義							一般化 [14]
状況外	報告 [9]	状況外 回想 [10]	予測 [11]		推量 [12]	説明 [13]	
状況内	実況 [2]	状況内 回想 [3]	状況内予想 [5]		状況内 推測 [6]	観測 [8]	
参加			行動 [1]	計画 [4]		自己記述 [7]	
空間要素	← 低 時間的距離のレベル 高 →						
時間要素	現在	過去	未来 意志的	未来 非意志的	仮定	習慣 ・恒久	
発話機能	提言		命題				

発話機能は「提言」か「命題」に分類する。「提言」は、品物・行為の交換に関する提供・命令で、基本的には同じ時空に存在する相手に働きかけたり、会話者同士の行為にかかわる発話内容が該当し、【行動】[1]と特定される。例えば、同じ時空にいる相手への「お醤油を取って」のような行為や物を要求する場合である。「命題」は、情報を交換する陳述・質問で、「私は桜が大好き」「この桜はピンクが濃いね」「桜はバラ科の植物だ」などが該当する。発話機能が

⁽²⁾ 以下、修辞機能を【】で、脱文脈指数を[]で示す。

「命題」のメッセージについて、このあと時間要素と空間要素を認定する。目の前の相手にグラスを渡して「ほら、お水を飲んで」と言うのはその場で行為を要求しているため「提言」に分類するが、「熱中症予防のためにはお水を飲んで」と伝えるのは、その場での行為を要求しているのではなく、熱中症予防のために水分補給が大切だという情報を提供していると考え「命題」とする。書籍サンプルの分析では、著者と読者の存在する時空を紙面と考え分類することができ、「お水を飲んで」のように行為を要求するメッセージは、例えば引用文や小説などの会話文以外では、現れることは少ないと考えられる。

時間要素は、話者のいる時間を基準として、メッセージで表現されている出来事がいつ起こったかを示す要素である。基本的にテンスや時間を表す副詞などによって表現され、「習慣・恒久」⁽³⁾「現在」「過去」「未来意志的」「未来非意志的」「仮定」に分類する。「太郎が花びらを拾っている」は「現在」、「去年見た青森の桜はすごかった」は「過去」、「来週、お花見に行こう」は「未来意志的」、「私は桜が大好き」は嗜好であるため「習慣・恒久」、「桜はバラ科の植物だ」は恒久的と判断し「習慣・恒久」に分類する。書籍サンプルで基準となる「話者のいる時間」については、著者が執筆した時間と考えることができる。例えば、「今、ここにりんごが一つある。」という文が書籍に書いてある場合、読者が読んでいる時間を基準にすると「過去」と考えることになるが、あくまでも著者が執筆した時間を基準とし、さらに、「今」という副詞と「ある」という現在を示す表現から、「現在」に分類する。

空間要素は、話者のいる場所を基準として、メッセージの中心との空間的距離を示す要素で、主語、主題、述部の主体から判断し、「参加」「状況内」「状況外」「定義」に分類する。「私」「あなた」が主語であれば「参加」、「太郎が花びらを拾っている」は太郎が話者と同じ時空にいると考えられるので「状況内」⁽⁴⁾、「去年見た青森の桜はすごかった」「桜は日本中で楽しめる」の桜は話者のいる時空には存在していないと考えられるので「状況外」、「桜はバラ科の植物だ」は桜一般について述べているので「定義」に分類する。

2.2.3 修辞機能と脱文脈化度の特定

表2を参照し、発話機能、時間要素、空間要素の組み合わせから、修辞機能と脱文脈度を特定する。

3. 分析結果と考察

3.1 アノテーション例

表3、表4、表5、表6に、本発表の分析対象4サンプルそれぞれの冒頭部分とアノテーション結果を示す。

2節で述べたように、分析単位であるメッセージごとに発話機能、時間要素、空間要素を認定し、表2を参照して修辞機能と脱文脈化指数を特定する。本研究の分析対象データは書籍サンプルであり、章や節の見出しなども含まれているが、これらの見出しは節の形式でないことが多く、本研究ではメッセージの種類が「(対象外)」に分類される。表3～表6では便宜上、

(3) 「習慣・恒久」には、属性、嗜好、評価も含む。

(4) 「状況内」には、話者の身体や所有物、思想、また、その談話の中で話題になっている事柄も該当すると考える。

表 3 LBN3-00077 冒頭 (SF：発話機能 時間：時間要素 空間：空間要素)

	メッセージ	SF	時間	空間	修辞機能 [指数]
a	【政策提言】	(対象外)			
b	私が描く国家像	(対象外)			
c	【政策提言】一序	(対象外)			
d	今まさに、二十世紀が終わろうとしている。	命題	現在	状況外	報告 [09]
e	西暦二千一年は新しいミレニアム（千年紀）の始まりでもある。	命題	習慣・恒久	状況外	説明 [13]
f	後の審判の後、訪れる「至福の千年紀」は、キリスト教徒にとって幻想ではない。	命題	習慣・恒久	状況外	説明 [13]
g	では、私たちにとって、現実を訪れる二十一世紀、近未来の二千年は至福の時代となるだろうか。	命題	未来非意志的	状況外	予測 [11]
h	もともと日本には世界に通用する非常に高い精神性を持った文化があった。	命題	過去	状況外	状況外回想 [03]

表 4 LBN3-00084 冒頭 (SF：発話機能 時間：時間要素 空間：空間要素)

	メッセージ	SF	時間	空間	修辞機能 [指数]
a	NPO 法の特徴	(対象外)			
b	NPO 法の特徴を申し上げておきます。	命題	現在	参加	実況 [02]
c	簡単に言うと	(従属)			
d	七点あります。	命題	習慣・恒久	状況外	説明 [13]
e	(1) 議員立法	(対象外)			
f	私は、この法律は社会の根幹に関わる法律だと	命題	習慣・恒久	状況外	説明 [13]
g	思っています。				

発話機能（表内の SF）欄に（対象外）と示している。表 3 の d では、「今」と「終わろうとしている」から時間要素が「現在」、「二十世紀が」から空間要素が「状況外」と分類する。e では、「西暦二千一年は」が空間要素の対象で、執筆しているその場にはない物なので「状況外」、二千一年がミレニアムの始まりであることは変わらないことなので時間要素は「習慣・恒久」と分類する。

表 4 の c は、従属度の高い従属節のため、メッセージの種類が「従属」である。本表では便宜上、発話機能の列に記入している。「従属」の場合、発話機能以降の分類は不要である。また、g の「思っています」は「この法律は社会の根幹に関わる法律だ」という命題に対して断言しないために付与したものと考え、「思っています」の部分は分類しない。ただし、「思っています」や「思います」「思う」などをすべて分類しないのではなく、例えば、「私は彼の気遣いをありがたく思っています。」のように引用節を伴わない場合には時間要素として分類する。

表 5 の c の空間要素の対象は「二つの種族」で、その場に存在するものではないため、「状況外」に分類する。また、d では、空間要素となる主語や主題が明示されていないが、c の主語で

表5 LBN4-00016 冒頭 (SF:発話機能 時間:時間要素 空間:空間要素)

	メッセージ	SF	時間	空間	修辞機能 [指数]
a	二 眠れる猫、力学の法則を学ぶ	(対象外)			
b	猫好き族と犬好き族	(対象外)			
c	世に、猫好き族と犬好き族という二つの種族があるらしい。	命題	習慣・恒久	状況外	説明 [13]
d	世の移ろいを怜悧に眺めている孤高の猫が好きな種族と、飼い主一家の一員と思い込んで気楽に戯れてくれる犬が好きな種族である。	命題	習慣・恒久	状況外	説明 [13]

表6 LBN4-00041 冒頭 (SF:発話機能 時間:時間要素 空間:空間要素)

	メッセージ	SF	時間	空間	修辞機能 [指数]
a	第九章 日本 義務表示の衝撃	(対象外)			
b	予想を超える波紋	(対象外)			
c	八月の末、カナダ、オンタリオ州で大豆畑に向かう車のなかだった。	命題	過去	状況外	状況外回想 [10]
d	案内役の三菱商事カナダの社員がつぶやいた。	命題	過去	状況外	状況外回想 [10]
e	「キリンビールが、使っているコーンスターチを遺伝子組み換えフリーのものに変えようというニュースが生産者に衝撃を与えていますよ。」	命題	現在	状況外	報告 [09]
f	これだけの大企業が方向転換しようとしていることが驚きなんです」	命題	習慣恒久	状況外	説明 [13]

ある「二つの種族」がdで主題になっていると推測できるので、同様に「状況外」に分類する。

表6のcでは、主語や主題が明示されていないが、後続する文から「案内役の社員がつぶやいたのは」のような主題が推測できるため、「状況外」に分類した。eでは、読点の位置から、「キリンビールが」が主語に思われるが、述部は「与えていますよ」で、その主体は「ニュースが」であるため、空間要素の対象になるのは「ニュースが」である。

3.2 修辞機能の出現と考察

サンプルごとの修辞機能の出現頻度と割合を表7と図1に示す。また、サンプルと修辞機能との対応関係を調べるために、対応分析を行った⁽⁵⁾。分析にはRのca関数を用いた。結果を図2に示す。

対応分析の結果より、修辞機能【説明】脱文脈化指数 [13] が4つのサンプルの中央に位置しており、いずれのサンプルでも用いられていることがわかる。これは、サンプルのNDCが3(社会科学)と4(自然科学)であることと関係があると考えられる。また、対応分析の結果から、サンプルごとに次のような修辞機能との関連が見られた。

⁽⁵⁾ 出現頻度が10件以下の修辞機能は除外した。

表 7 サンプルごとの修辞機能の出現頻度

	01 行動	02 実況	03 状況 内 回想	04 計画	05 状況 内 予想	06 状況 内 推測	07 自己 記述	08 観測	09 報告	10 状況 外 回想	11 予測	12 推量	13 説明	14 一般 化
LBn3.00077	0	4	1	17	1	1	9	3	6	16	14	14	62	1
LBn3.00084	0	0	12	12	0	0	3	1	6	30	20	5	120	0
LBn4.00016	0	1	8	2	0	1	15	13	3	42	0	8	136	4
LBn4.00041	0	7	12	6	3	1	15	15	26	72	20	2	168	5

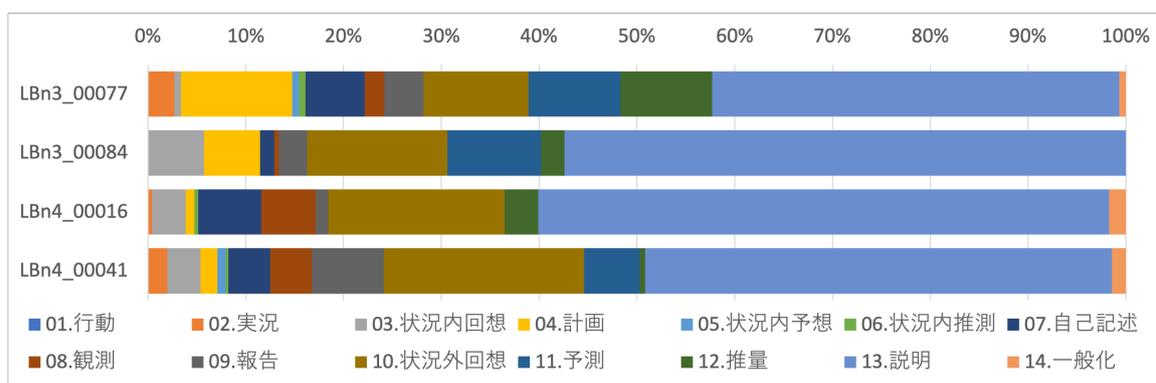


図 1 サンプルごとの修辞機能の出現割合

LBn3.00077 では【計画】[04]【推量】[12]、LBn3.00084 で【実況】[02]【報告】[09]【予測】[11]、LBn4.00016 で【観測】[08]【自己記述】[07]、LBn4.00041 で【状況内回想】[03]【状況外回想】[10] が特徴的と考えられる。

LBn3.00077 のタイトルは「2010 年日本実現」だが、出版年が 1999 年のため、未来のことを述べていることがうかがえ、そのため、【計画】[04] や【推量】[12] が特徴的な修辞機能として現れていると考えられる。LBn3.00084 は、「時代が動くとき」というタイトルの書籍である。【実況】[02]【報告】[09] とともに、時間要素が「現在」の修辞機能のため、執筆時のことについて言及している内容であることがうかがえる。LBn4.00016 のタイトルは「天文学者の虫眼鏡」である。【観測】[08]【自己記述】[07] とともに、時間要素が「習慣・恒久」の修辞機能で、空間要素が「状況内」か「参加」かの違いである。著者自身のことや、著者の感情、思考、所持品、また、著者がいる空間にあるものについて、性質や習慣などが言及されていることがうかがえる。LBn4.00041 のタイトルは「遺伝子組み換え食品を検証する」である。アノテーション例にあげた本文で見られたように、回想場面を描写していることから、【状況内回想】[03]【状況外回想】[10] が特徴的になったことがうかがえる。

以上のことから、書籍データについても、修辞機能分析の分類法によって、修辞機能の観点からその書籍の特徴を捉えることが可能であると考えられる。

しかし、本研究の目的である、文体的特徴との関わりについては、本分析では明らかにすることはできなかった。今回の 4 サンプルのうち、客観的なものが 1 つあったが、ほかの 3 つとその 1 つとでは、違いは見られなかった。また、硬度についても、語りかけ性度についても、その差異と対応するような修辞機能の差異はわからなかった。サンプル数が少ないためとも考

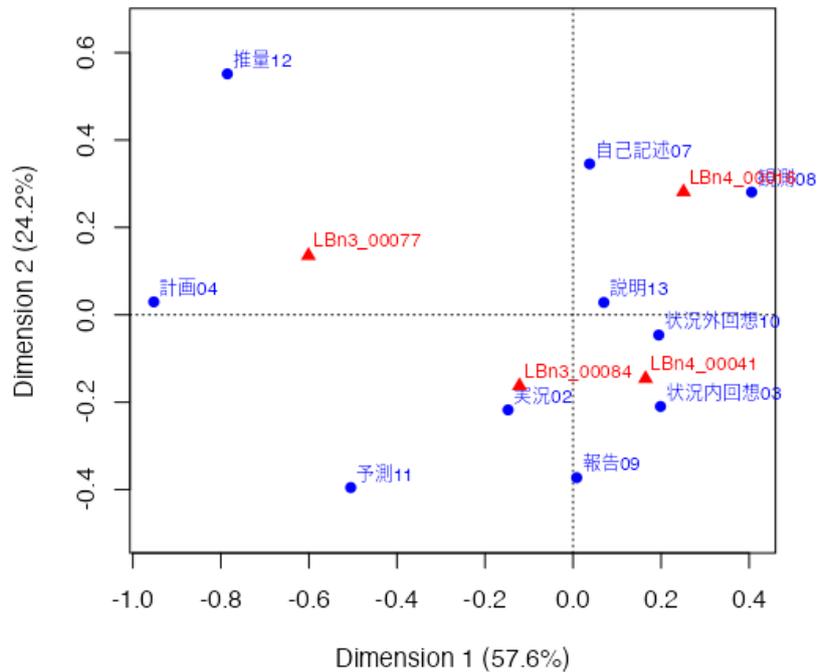


図2 サンプルごとの修辞機能の出現割合

えられるが、今回専門度が4サンプルとも同じであったことから、専門度に修辞機能の差異が見られることも考えられる。今後は、サンプル数を増やすとともに、典型的なサンプルを選択して分析することを検討する必要がある。

4. おわりに

本発表は、人手による印象評定から付与された文体的特徴について、修辞機能と脱文脈度の観点によって検討する研究のパイロットスタディである。文体的特徴と修辞機能・脱文脈度の関連を検討することを目的とし、課題として、異なる文体的特徴をもつサンプルの修辞機能と脱文脈度の特徴を確認した。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』図書館サブコーパスから4つのサンプルに修辞機能分析の分類法でアノテーションした。分析の結果、4つのサンプルに共通する修辞機能があることがわかり、また、それぞれのサンプルに特徴的な修辞機能が確認できた。しかし、文体的特徴と修辞機能の関わりについては、明らかにできなかった。今後の課題として、分析サンプルを増やすことが挙げられるが、その際に、スタイル（丁寧体か普通体か）などを揃える、文体的特徴の典型的なものを対象とするなど、分析サンプルを検討する必要があると考えられる。

謝 辞

本研究は JSPS 科研費 JP19K00588、JP23K00569 によるものです。

文 献

- 柏野和佳子 (2013). 「〈共同研究プロジェクト紹介〉萌芽・発掘型：テキストの多様性を捉える分類指標の策定 書籍サンプルの文体を分類する」 国語研プロジェクトレビュー, NINJAL Project Review, 4:1, pp. 43–53.
- C. Cloran (1994). “Rhetorical units and decontextualisation: An enquiry into some relations of context, meaning and grammar.” Unpublished doctoral dissertation, University of Nottingham Nottingham.
- C. Cloran (1999). “Contexts for learning.” Frances C (Ed.), *Pedagogy and the Shaping of Consciousness: Linguistic and Social Processes*. London: Continuum International Publishing. pp. 31–65.
- 佐野大樹 (2010). 『日本語における修辞ユニット分析の方法と手順 ver.0.1.1：選択体系機能言語理論 (システムック理論) における談話分析 (修辞機能編)』.
- 佐野大樹・小磯花絵 (2011). 「現代日本語書き言葉における修辞ユニット分析の適用性の検証- 「書き言葉らしさ 話し言葉らしさ」と脱文脈化言語 文脈化言語の関係-」 機能言語学研究, 6, pp. 59–81.
- 田中弥生 (2022). 「修辞機能と脱文脈化の観点からの日本語談話分析」 博士論文 (未公刊), 東京大学大学院総合文化研究科.
- 田中弥生・佐尾ちとせ・宮城信 (2021). 「児童作文の評価に向けた脱文脈化観点からの検討」 言語処理学会 第 27 回年次大会 発表論文集, pp. 750–755.
- 佐尾ちとせ・宮城信・田中弥生 (2023). 「修辞機能分析を活用した作文指導」 日本語習熟論研究:1, pp. 140–158.
- 田中弥生・小磯花絵 (2019). 「家庭での幼児の発話の修辞機能：脱文脈化の観点からの検討」 言語資源活用ワークショップ発表論文集:4, pp. 106–118.
- 田中弥生 (2017). 「相談における談話構造：修辞機能と脱文脈化の観点からの分析」 言語資源活用ワークショップ発表論文集, 1, pp. 69–78.
- 田中弥生・小磯花絵・大武美保子 (2022). 「脱文脈化の観点から見た共想法に基づく高齢者談話の分析」 国立国語研究所論集:22, pp. 137–155.
- 田中弥生・小磯花絵・大武美保子 (2023). 「共想法による話し言葉・書き言葉における修辞機能の特徴－テーマとの関係に着目して－」 言語処理学会第 29 回年次大会発表論文集, pp. 1356–1360.
- 浅原正幸・加藤祥・立花幸子・柏野和佳子 (2014). 「文体指標と語彙の対応分析」 第 6 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集, pp. 11–20.
- 浅原正幸・加藤祥・立花幸子・柏野和佳子 (2015). 「文体指標と語彙系列の対応分析」 第 7 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集, pp. 7–16.
- 柏野和佳子 (2015). 『『BCCWJ 図書館サブコーパスの文体情報』 (2015 年公開第 1 版)』 .